

本朝俗諺志

米山（菊岡）沾涼著 延享三（1786年）跋 早稲田大
学蔵によるも出版者不明・出版地不明 京都大学所蔵本
によれば 江戸池田二酉堂刊か。

「遠山奇談後編 卷之四 第廿二章」（1801）に同様の
話がある。ただ「遠山奇談」には続きとして田村將軍の
話などが付加されている。

卷之四の目次には、

廿七 信州戸隠山

とかくしさん
九頭竜王

とある。

廿七 戸隠山

とかくしさん

信州戸隠大明神ハ手力雄命也社領千石別當天台宗顕光寺坊
中多クあり社の並ひに九頭竜王の宮あり世に生神といふ一
ヶ年ニ四十石の御供米を附毎日御供所にしてこれをとゝの

いきかみ

ふす

へ内陣に備ふに一粒ものこらすなくなる也また願望の人ありて梨なしを供するにこれを食する音社の外まできこゆる也奥院八大日か嵩と云坊より七里あり先達にしたかひ行に此の間拝ミ所十三ヶ所有五里ほと行は小池と云清潔しの清水わくの湧池ありわたり四五尺斗也此所より外に水一滴てきもなし此池に豉虫まいまぢむしのやうなる黒き虫一面にありて水面うはをふさく葭茅を以此内の水をあたへ給へといひて丸く輪を書かの虫左右へおかれ暫の内輪の内に虫なし幾人いくたりにてもひとりくにかくのことくし我喉のどを潤うるほすほと水を汲也近世越後の人寄進せし鍋ひとつ茶碗など有此水を涌し中食なとつかふ是まで五里の間休む所なし是れより七里松原けん劔ヶ峰と云難所へかゝる七里松原といふハ四十町余六丁一リ也山の頂也左右の谷より五葉の松生おいしけ茂りたり此の松ハ小枝ほそく藤蔓のことくにして折れどもおれす餘木より餘木にからミ付藤棚のことし此のうへを行也それより劔ヶ峯へ上ル誠に劔を立てたることくにして登りつめて直にくたる也嶺いたたきの径こみちは魂を消斗也是を暫しばらくくだると向ふに大日か嵩たけあり石佛の金胎たけ両部の大日二尊長三四尺谷を隔てゝ拝む也その元にて八大仏なるへしそれへ

ハ^{かけし}崖岸さかしく中々人倫の通路ならさる所也常に霧ふかく
立ちこめたり大念佛を高聲唱ふれはしはらく霧はれて二尊
拝まれ玉ふ也此山朝日夕日にハ五色の雲虹のことくに立山
中金色の光ありこれを^{らいこう}来迎といふ也常に禅定なし六月朔日
より晦日まで先達を以登山する也

註 早稲田大学図書館蔵。該当PDFで16、17コマ目。

なお、山下琢己による翻刻が東京成徳女子短期大学
紀要 no. 24 (平成3年) にある。